

# 「いかにも」の語史

## ― 副詞の文法化の一類型 ―

中 川 祐 治

### 一 はじめに

現代語の「いかにも」の意味用法については、おおよそ次の二つに纏められる。

- ① 典型的な状態に合致している様子を表す。述語にかかる修飾語として用いられる。
- ② 相手の言うことを無条件で肯定する様子を表す。

〔現代副詞用法辞典〕

このうち、②はいわゆる応答詞の用法であって文語的であるので、実際を中心となるのは①である。

1 いかにも人の好きそうな笑顔だったからだ

(赤川次郎「女社長に乾杯!」)

2 いかにもアメリカ人らしいキヤルの現実処理に感心した

(開高健「裸の王様」)

3 その男はいかにも感心したように同僚たちに行った

(大江健三郎「孤高の人」)

4 その声がいかにも寂しかった

(三浦綾子「塩狩峠」)

5 それぞれの住民の気質を、いかにもうまく皮肉った文句だ

(五木寛之「風に吹かれて」)

現代語における「いかにも」は、用例1〜3のように「そうだ」「らしい」「ようだ」といった形式と共起して用いられることが多く、また、4、5のように一種の程度副詞として機能する例も認められる。

また、「いかにも」を語構成の観点からみると、「いかにも」で

あつて、不定語「いかに」と係助詞「も」から構成されていることが分かる。「いかにも」を構成する中心的な成分である「いかに」については、于(一九九九)において、古代語の「いかに」は疑問表現や詠嘆表現に用いられることが主であり、専ら命題にのみ関わり(あるいは命題の構成成分となり)、モダリティには関与しないことが指摘されている。また、古代語の「も」については、大野(一九九三)によれば、「も」が用いられる文の文末には否定・推量・疑問・反語などの不確実性の陳述がくること、「も」は上に來ている語を、不確定的な、仮定の、未定の、非限定的な対象として扱うことが示されている。これらの指摘に従うならば、古代語の「いかにも」についても、命題内部においてのみ機能すること、また、否定・推量・疑問・反語などの不確実性を表す意味用法をもつことが想定される。

本稿は、この「いかにも」の語史について、奈良時代から江戸時代の用例をもとに実証的に明らかにしようとするものである。また、その理論的枠組みとして、文法化、及びそれに関連する諸概念を用いる。

文法化(grammaticalization)とは「語彙項目や語彙構造が、ある言語の文脈の中で文法的な機能を果たすようになる過程」であり、ある語彙項目が歴史とともにより文法的になる現象を指す。文法化にはそれに関連する種々の概念があるが、とりわけ本稿に関わ

りを持つものとして、主観化(subjectification)が挙げられる。主観化とは「命題に対する話し手の主観的な信条・態度がいつそう意味に組み込まれていく語用論的・意味論的過程」をいい、具体的には「指示的、命題の意味からテキスト的、感情表出的、あるいは、対人的への意味変化」を指す。

本稿ではこれらの理論的枠組みをもとに、以下、変化の実態に即して、第一段階から第五段階までの過程を示し、変化のモデルを提示する。

## 二 変化の実態

### 二・一 第一段階

第一段階は、「いかにも」が命題内のみにて機能していた段階である。奈良時代の『万葉集』には「いかに」の用例はみられるものの、「いかにも」の例はみられず、確認できた最も古い例は「土左日記」のものである。

6 あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらばやらん

(土左・一月七日)

この例は、「まずかろうが、どうだろうが、ついでがあつたら送つてやろう」と解釈され、一種の対比的表現として用いられている

ものである。「あしくもあり／いかにもあり」の主語は「子どもの作った歌（を送ること）」であつて、「いかにも（あり）」はその属性を示していることから、命題内で機能している例と考えられる。これに準ずる例は、次のように平安中期頃までの資料に共通して認められる。

7 みかどには、つとめてよりさべき人々にの給て、「いかにもあれ、人のこん、かくなんと申せ」との給ひて

（宇津保・二〇）

8 西の対の御かたは、かの踏歌のをりの御たいめむの後は、こなたにも、きこえかはし給ふ。ふかき御心用ひや、浅くもいかにもあらん

（源氏・胡蝶）

これらの例の「いかにも」は、「どのよう（様）」で「ある」のかといったサマを示すものであり、品詞論に即して言えば、情態副詞や形容詞（属性形容詞）にちかい。その一方で、6のような例は、はたして一語の「いかにも」の例として認められるのかということについては疑問が残る。ここでは、「あしくも」の対比的な語として「いかにも」が選択されており、「あしくも」が「あしく＋も」と分析されるのと同等に、ここでは「いかに＋も」の二形態素から構成されているとみるほうが自然である。すなわち、「土左日記」

頃には一語としての「いかにも」は成立しておらず、その前段階にあったと考えられるのである。しかしながら、二形態素からなる、前段階の「いかに＋も」が命題内のみで機能する語であつたことは確認しておく必要がある。

## 二・二 第二段階

第二段階は、第一段階と同じく命題内で機能しつつも、一語としての「いかにも」が完全に成立する段階である。この段階は、疊語「いかにもいかにも」の形式で用いられる例が多くなる、否定形式と共起する例が多くなる、といった特徴を有する。

9 なほあやしく、例のこ、ちに違ひておほゆる気色もみゆべければ、やむことなき僧などよびおこせなどしつ、心みるに、さらにいかにもくあらねば、かうしつ、死にもこそすれ

（蜻蛉・中）

10 人の為に申すにも侍らず、御身のための事也。三四の君、御前をも、いかにも仕うまつらんと大将殿の給ふは、北の方の御心に随ひ給ふにこそ

（落窪・四）

11 よろづをながめ思ふに、いといふかぎりにもあらねど、いまは面馴れにたることなどは、いかにもく思はぬに

（蜻蛉・下）

12 物どもはいとよかなり。いかにもく使ひ給へ（落窪・二）

13 とどまかくざまに思ふに、胸のせきのぼる心地して、いかにもく、すべき方も思え給はぬを（源氏・蜻蛉）

14 徒歩路もまたおそろしかなれど、それはいかにもく地に着きたれば、いとたのもし（枕草子・三〇六）

15 いかにもく、過ぎにし方の事を、我ながら、更に、え思ひ出でぬに（源氏・夢浮橋）

これらの例における「いかにも」についても、第一段階と同じく命題内で機能しているものと考えられる。9は「どのよう（どのようにも）」に「ある（ない）」かを、10～13は、それぞれ「どのよう」に「仕ふ」「思ふ」「使ふ」「す」かを、14は「地に着いた」様子・状態について述べているものであって、否定形式と共起しているか否かの違いはあるにせよ、いずれも命題内で機能していると考えられる。すなわち、否定形式と共起している「いかにも」は、この段階においては、あくまでも「共起」のレベルであって、「呼応」のレベルにはなく、「いかにも」が否定形式と直接結び付いている段階にはない。表面上、「いかにも」が否定形式と結び付いているようにみえるのは、「いかにも」全体が、とみるよりも係助詞「も」に起因すると考えるほうが実態に即しているであろう。したがって、この段階における「ハイカニモー否定形式」は、あくまでも共起

する例が数量的に多いという現象レベルにあると考えられる。

その一方で、同じく否定形式と共起している15の例は、表面上は他の例と同じようにみえるが、第三段階への過渡的な例として注意すべきものである。意味上「いかにも」は「思ひ出づ」と対応し、「思ひ出づ」の内容がどのようなかを示しているようにもみえるが、ここは「なんと」しても、それまでのことを、自分ながらまるで思ひ出せないのですが」と解釈すべきものであって、「いかにも」が直接「思ひ出づ」の内容を示しているとは考えにくい。また、否定形式と呼応しているとも考えられず（否定形式と直接結び付いているのは副詞「更に」）、また不可能の意味を表しているのではない。ここでの「いかにも」は、現代語に置き換えれば「なんと」しても」と訳すべきもので、この意味からは、「いかにも」が客観的な意味からより主観的な意味へとシフトしているように感じられる。また、構文的にみても、「いかにも」が文頭に位置していること、「いかにも」と「思ひ出づ」の間に複数の語が挟み込まれ、構文上、離れた構造になっていることなどを指摘することができる。このことは、「いかにも」と「思ひ出づ」との意味（語彙的意味）的な結び付きが弱まっていること、「いかにも」の意味がより話手の側にシフトしていることを示すものである。

### 二・一・三 第三段階

第三段階は、客観的意味から主観的意味へとシフトした段階をいう。他方、〈イカニモ―否定形式〉は固定化し、否定形式と意味的に強く結び付いた呼応の段階へと至る。

16 いかにもありて御覽せさせまほしうこそ (和泉式部)

17 惜しからぬ身は、いかにも、疾くなりなばや (狭衣・一)

18 長らふべき心地もせぬまゝに、おさなき人々を、いかにも  
くわがあらむ世に見をくこともがなと、臥し起き思ひ歎き

(更級)

19 いかにも、今少し、御盛りの程をこそ誰にも見せてまつ

らめ (狭衣・一)

この段階では、構文的には、意志・願望のモダリティ形式と共起し、それに関与する点が、まず、特徴として挙げられる(用例16、19)。ただし、16は、意味的には「なんとかして私の心をお見せしたいものだ」と解釈されるものの、形式的には「いかにも」は「あり」の補語成分であり、17においても「ばや」と共起し、「早くどうとでもなつてしまいたいものよ」と解釈されるものの、意味的には「なる」の補語成分である。このような「いかにも」は、厳密な意味での願望のモダリティ成分とは言えず、その前段階の、過渡的

な例であると思われる。他方、18では、形式的にも意味的にも補語成分ではなく、話し手の「なんとしても」「せひとも」という強い気持ちを表しているものであって、「もがな」と呼応する形で願望のモダリティを形成していると考えられる。同様に19も「む」と呼応して意志のモダリティを形成している。この段階に至ると、「いかにも」は、前段階までとは異なり、命題内で機能するのではなく、モダリティ(命題外)成分として機能するようになる。換言すれば、これは客観的意味から主観的意味への完全なシフトであり、語用論的強化(pragmatic strengthening)の二つである。

また、この段階においては、根源的モダリティ(root modality)から認識のモダリティ(epistemic modality)への拡張も起こる。<sup>12</sup> 16、19が言語表現上明示されている(あるいは文脈上推測が可能な)主語の願望や意志を表しているのに対し、以下の例は、表現上明示されていない話し手の認識的意味を表している。

20 いかにも、乳母の業ならん。さうじ身は何事のつらからん  
にか、「たちまちに行隠れん」と思はん (狭衣・一)

21 たゞ、「いかにも、海には入らずなりにけるなめり」と、聞  
き給に (狭衣・二)

用例20は、会話文であり、表現上明示されていない話し手(狭

衣)が、命題へ乳母の仕業であるコトの確実性について、ある証  
拠へさうじ身は何事のつらからんにか、「たちまちに行隠れん」と  
思はん)に基づき査定判断を下した認識のモダリティの例である。  
21についても同様に、命題へ(女君が)入水しなかつたコト)に対  
する、話し手(狭衣)の査定判断を示している。「いかにも」が、  
そのような「サマである」といった形容詞的な意味から、話し手が  
そのようなサマであると「判断する」といった意味への拡張は、  
Speakerの言葉を借りれば、現実世界(外的)領域から推論(内  
的)領域への拡張であり、主観化がさらに進んだものとして解釈で  
きる。

他方、ヘイカニモ一否定形式)が固定化し、意味的に強く結び付  
いた例もみとめられる。

- 22 すべて、いかにも思ひよる方候はず (浜松中納言・五)  
23 太政大臣の御かたこそ、いかにもく、かやうの人のおは  
せねば (狭衣・一)  
24 この、昔より候給し官耀殿ぞ、とり分きたるさまに物し給へ  
ど、御子の、いかにもおはしまさねば、后にも居給はぬなる  
べし (狭衣・三)

これらの例はいずれも対象が存在しないことについて叙述した文

であり、ここでの「いかにも」は、「思い当たる向き」「このような  
人」「御子」が、「(い)ない」ことを強めているにすぎず、前段階  
のように述語動詞と意味的に関わりあっているわけではない。これ  
らの例における「いかにも」は、たとえ省略しても命題の内容量に  
は何の増減も及ぼさず、いわゆる陳述副詞として機能しているもの  
と考えられる。

#### 二・四 第四段階

第四段階は意味の漂白化 (semantic bleaching) が起こり、「どの  
よう(様)」という「いかに」の原義が失われる段階である。また、  
対命題の意味から対人的 (interpersonal) 意味への拡張やメタファ  
ー的拡張、イデオム化も起こる。

前段階の22、24で既に否定形式と呼応する「いかにも」が単に強  
調を示す意味へと変わっていたが、これが肯定文脈においても用い  
られるようになる。

- 25 苦しきにそへても、面影はなれ給はず恋しきに、いかにも  
胸うちつぶる、まで思さるれば (夜寝覚・五)  
26 いかにもその心ざし深き事と見えければ、すべて力及ばず  
(発心集・五)

27 としを経てかしの雪はつもれどもしもとみるにぞ身はひえ

にけるといひければ、いみじうあはれがりて、感じてゆるしけり。人はいかにもなさはあるべし (宇治・一一一)

これらは、前段階の認識のモダリテイの例の延長線上にあるもので、話し手の「間違ひなく」「確かに」「まったく」といった確信・断定的判断に基づく強調といつてよいであろう。ところが、以下のような例になると、話し手の認識・判断は裏面化し、専ら程度の甚大さを表す程度副詞として機能するようになる。<sup>13)</sup>

28 何にもいみじく悦びたる御気色にて御座ますを

(発心集・補遺)

29 イカニモウルセキ者也

(十訓抄・一)

30 容貌は如何にも悪かれ

(義経記・三)

31 十一月十八日のことなれば、風はげしく吹きて、いかにも

寒きに (御伽・ものくさ太郎)

32 溝のあつたを宮のいかにも軽うざつと越えさせられたれば

(天草版平家・二)

33 「〜」と思ひ、いかにも静かに柔軟なふりで馬の傍に歩ん

で来 (エソポのハブラス)

この段階に至ると、「元々の「いかに」の意味は完全に失われ、こ

こでの「いかに」は単なる程度の甚大さを表す程度副詞(強調詞)としてのみ機能していることが分かる。これは、文法化に至る段階で多く認められる意味の漂白化である。

また、これに関連して、命題の意味から対人的意味への拡張も進む。前段階において、既に認識のモダリテイを表していたが、この段階に至ると、命題内容に対する話し手の心的態度(認識・判断)から発話の聞き手に対する対人的意味へと広がりを見せる。この広がりとは、一種のメタファ的拡張であり、このことは、英語の法助動詞(「may」「must」など)と同じく根源的モダリテイ(義務のモダリテイ)と認識のモダリテイの二つの意味用法を有する「べし」と共起する「いかに」の例を考えると分かりやすい。用例34は認識のモダリテイ、35は義務のモダリテイの例であるが、この両者は、「ある根拠(宿縁あさからず)がそう判断(申ゆるす)せよ」と強制するの、「ある権力(源頼朝)がその行為(失ふ)をせよ」と強制するの、かという点でメタファ的に連続するものである。他方、認識のモダリテイは対命題的なのであるが、義務のモダリテイは行為の拘束という点で命令のモダリテイに結び付きやすく、結果、対人的意味を有するといった相違点もある。<sup>14)</sup>

用例36、39は、「いかに」が用言の命令形と呼応して、典型的な対人的意味である命令のモダリテイとして機能している例である。

34 宿縁あさからず。このうへは、彼御気色におきては、いかにも申ゆるすべし  
(古今著聞・三四〇)

35 中にも小松三位中将の子息、中御門の新大納言のむすめの腹にありときく。平家の嫡々なるうへ、年もおとなしかんなり。いかに尋いだして失ふべし  
(平家・一二二)

36 この御祭の御きよめするなりとて、四目引めぐらして、いかにもく、人なよせ給そ  
(宇治・一一九)

37 今度三井寺へよせたらんには、いかにもしてまづ競めをいけどりにせよ  
(平家・四)

38 時致も、法師になるべき身の、男になりて、母の勤当をかうぶるも、たゞこの故なり。いかに、とくいそぎたまへ  
(曾我・四)

39 あらあさましや此所は、鬼の岩屋と申して、人間更に来る事なし。客僧たちは是まで来らせ給ふぞや。いかにもして自らを都へ帰してたび給へ  
(御伽・酒吞童子)

さらに、メタファア的拡張の例として、この段階では「いかにもなる」のイデオム化が進む。<sup>15</sup>

40 平家の人々「此上はたゞ一所でいかにもなり給へ」

(平家・七)

41 せめては一人なり共相具たらば、縦のがれはてず共、手を取くみていかにもなりなまし  
(保元物語・下)

42 木曾は今日六条河原でいかにもならうずることであつたれども、幼少から一所でいかにもならうと契つたことが思われて  
(天草版平家・四)

ここでの「いかにも」は、「いかにもなる」で「死ぬ」の意味を表しており、これは「どうとでもなる」という放任、投げやりな気持ちに基づくメタファア的拡張であると考えられる。<sup>16</sup> また、元々は、文脈上、語用論的に、そのような意味(死ぬ)であると解釈されていたものが、次第に文脈から独立して、慣用句として用いられるようになった過程からすると、語用論的強化の一つとも考えられる。

## 二・五 第五段階

第五段階においては、語用論的強化がさらに進み、対人的意味、談話構成機能が一層強まる。前段階において「全く」「なるほど」といった、命題内容に対する話し手の確信や断定を表す用法がみられたが、これが聞き手(に属する命題内容)に向けられると、相手の発話に対する同意を示すようになる。



43 して納むる時、尾張に問う、どこもとに、御ざるぞと云、いかにも、奥じやと云  
 (狂言六義・三人夫)

44 先づ戴いてと 色差出せば。詞いかにもくよう合點  
 しました  
 (女殺油地獄・下)

45 明晩安倍川原におゐて勝負を決せずとの返事、元来身共も覚悟のまへ、いかにもと挨拶せし所に  
 (東海道中・發端)

46 くり「ハ、ア、柿の都殿ではござらぬか かき「いかにも貴公は栗の都殿ではござらぬか  
 (浮世風呂・前編下)

これらの「いかにも」は、「おお」「はい」といった意味で応答詞として機能しており、談話標識となっている。この段階に至っては、「いかに」の原義の持つ不定の意味や、話し手の認識、意志、願望、聞き手への働きかけ、行為の拘束といった意味は失われ、談話標識としての機能を有するようになる。これは、主観化の最終段階にあたると考えられる。

### 三 変化のモデルと現代語への展開

以下の図は、「いかにも」の変化のモデルを示したものである。

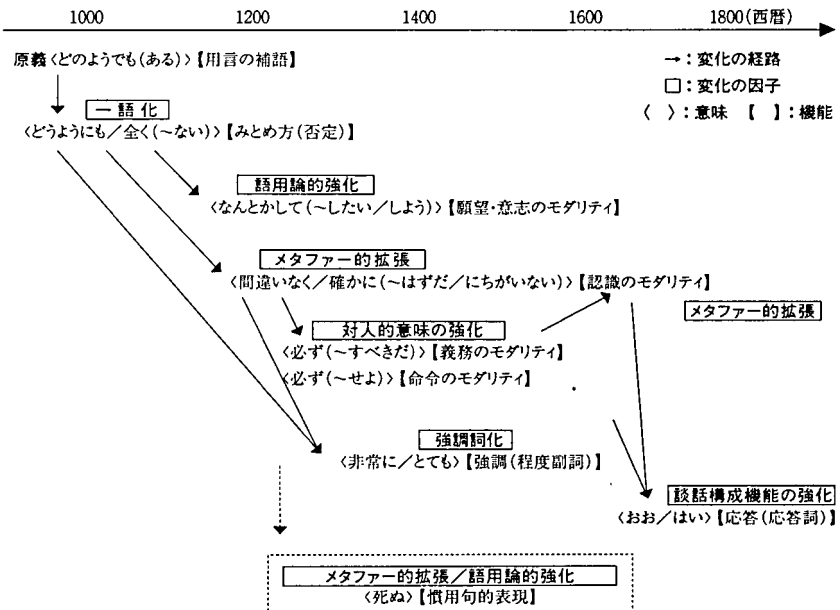


図 「いかにも」の変化のモデル

以上、文法化、主観化の理論的枠組みに基づき、「いかにも」の意味用法の変化に沿って、その語史について明らかにした。それでは、現代語における「いかにも」の意味用法はどのように捉えればよいのであろうか。

47 いかにも今風のギャルっぽい子です

(chibukuro.yahoo.co.jp/service/question\_detail.php?questionId=9738138)

48 いかにもネタくさい実験だが、困ったことに、参加者はちよっぴり本気だ

(plusdmedia.co.jp/puser/articles/0609/07/news030.html)

49 わたしも、いかにもなカレー、食べてきました

(blog.so-net.ne.jp/yuhi/2006-04-18)

50 味のある変な建物とは反対に、嫌味なくらいいかにもな建物もよく見かける

(www5.airnet.ne.jp/thepond/html/structur/ikanimo.htm)

現代語における「いかにも」は、用例1〜3のように「そうだ」「らしい」「ようだ」といった形式と共起して用いられることが多い。これらの形式は認識のモダリティとしても機能するものであるが、現代語において「いかにも」と共起して用いられる場合には認識のモダリティとはならず、対象の様子、状態を叙述する。これは

47、48のような「っぽい」「くさい」というある状態を形容詞化する接尾語とともに用いられていることから裏付けられる。すなわち、現代語においては、「全く〜である」といった意味で、一種の程度副詞（強調詞）として機能していると考えられる。しかしながら、典型的な程度副詞である「とても」や「非常に」などと比較すると、「いかにも」による程度修飾は、「話し手の認識や判断、評価に基づく」といったニュアンスが強く、その点で陳述副詞にちかい。これは、歴史的にみれば、古代語における「いかにも」の認識のモダリティ性が継承されていると考えられ、同時に、室町期に多くみられた程度副詞としての機能を継承するものである。すなわち、現代語「いかにも」の意味用法は、文語として僅かに残る応答詞の例を除き、古代語の程度副詞と認識のモダリティ副詞の二つが合流して継承されたものと言える。

その一方で、「話し手がどこから見てもそうであると認識、判断、評価する」といった意味から、49、50のような新たな意味用法も出現している。これらは一種の評価系形容（動）詞であると思われるが、これは文法化、主観化の流れに逆行するものであり、更なる検討が必要である。

#### 四 結 び

以上、本稿では、文法化、主観化の理論的枠組みをもとに、副詞

「いかにも」の語史について明らかにした。「いかにも」の機能は、品詞論に即して言えば、へ情態副詞(属性形容詞) ↓程度副詞/陳述副詞(応答詞)といった変化をたどることが分かった。換言すれば、これは、客観的意味から主観的意味、命題的意味から対人的意味への変化であり、主観化の流れの中に位置付けることが可能である。今回、「いかにも」の語史を明らかにすることで、この主観化の流れが日本語副詞の変化にも適用されることが確認できた。明治期から現代語までの変化の詳細については別稿に譲りたい。

【注】

- 1 この他、「げ」「っばい」「めく」などの接尾辞とも共起する。
- 2 森田(一九八九)には、「いかにも」は形容詞・形容動詞、ならびにそれに準ずる語(名詞)に係って、全体として連体修飾語か連用修飾語になることが多い」との指摘がある。
- 3 使用したテキストについては紙幅の都合上割愛するが、物語、日記、和歌、キリシタン資料、狂言、浄瑠璃などの資料から網羅的に、計五四二例の用例を採集した。また、用例の採集にあたっては、各種の索引や「新潮文庫の1000冊(CD-ROM版)」を用いた。
- 4 Hopper and Taugott (1993: XV) による。引用部の訳は稿者。
- 5 Taugott (1995: 31) による。引用部の訳は稿者。また、主観化の概念の整理には、深田智(二〇〇一)を参考にした。
- 6 秋元(二〇〇二: 一頁)による。また、Adamsen (2000) では、主観化の例として「lovely」が取り上げられ、叙述的形容詞から、心情的形容詞、強調詞、応答詞へと展開することが指摘されている。

7 例えば、語の意味用法がAからBへと変化する場合、A→Bのように古意味用法Aが突然Bへと変わるのではなく、A→A/B→Bといったように、A/Bが共存する段階を経る。以下、本稿で示す段階とは、新しい意味用法が出現する点に着目したものであって、次段階進むと、前段階にみられた古い意味用法が即消滅することを示すものではない。

8 例えば、「蜻蛉日記」においては全五例のすべての例が「いかにも」の例であり、「宇津保物語」においては全三例中二例が、「源氏物語」においても全一八例中一五例が疊語としての例である。疊語として用いられるということは、裏を返せば、一語としての「いかにも」が完全に成立したことを示している。

9 「共起」及び「呼応」の術語の定義は、工藤(二〇〇〇)に従う。そこでは、共起は量的現象、呼応は質的現象であって、質的なものが量的現象を生じるとともに、量的現象が質的変化をもたらすこと、文の中の意味機能が、使用のくりかえしの中で、しだいに単語の意味機能として「やきつけられていく」ことなどが示されている。

10 一般的に、構文上、構文のより外側により主観的意味(陳述性)の強い語が位置することが知られている。

11 「認知科学辞典」によれば、語用論的強化とは「意味変化のプロセスにおいて、元来は文脈依存で語用論的な含意であったものが、慣習化されて文脈からある程度まで独立した意味となること」をいう。

12 Sweetser (1990) では、根源的助動詞の意味が現実(社会物理)世界から認識世界へとメタファエ的に拡張されることが示されている。本稿も基本的にこの考えに従うものである。

13 これらの例は、特に室町時代になり多く現れ、「御伽草子」では全二例中七例、「天草版平家物語」では全二六例中一〇例、「大蔵虎明本狂言集」では全三二例中二六例が、程度副詞としての例である。また、同時代の「日

葡辞書」には、「[canino, イカニホ (如何にも) 非常に]」との記述がある。

14 Sweetser (1990) の指摘にもあまふように、法助動詞によるモダリティには叙述的 (descriptive) な用法と遂行的 (performative) な用法がある。すなわち、「You can speak French.」とどう文を用いて、「あなたはフランス語ができる」あるいは「あなたはフランス語を話してもよい」という叙述的、遂行的モダリティのいずれをも表すことが可能である。

15 この他にも、室町期においては「いかにもして」の例も増加する。喜誌、願望、命令のモダリティを表す場合、多くの形式を取る。

16 このような例は、特に中世期の重記物語に多くみられる。

17 この評価形容詞的用法が進んだものとして、「イカニホ (系)」とどう語がある。ウェブ上のフリー百科事典「ウィキズディア」には、ゲイ用語で「いかにもゲイのようである人のこと」とある。これは「いかにも」の持つ「どこからどうみてもそう判断できる」の対象を、ある特定のものに限定して拡張した変化であると考えられる。

#### 【参考文献】

秋元実治 (二〇〇二) 「文法化とイデオム化」ひつじ書房

于康 (一九九九) 「日本語に於ける不定語の構文的機能に関する歴史的研究」

汲水社

大野晋 (一九九三) 「係り結びの研究」岩波書店

工藤浩 (二〇〇〇) 「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法』モダリ

ティ」岩波書店、一六一―一三三―四頁

深田智 (二〇〇一) 「Subjectification とは何か」『言語科学論集』第七号、六

一―八八頁

森田良行 (一九八九) 『基礎日本語辞典』角川書店

Adams, Sylvia (2000) "A lovely little example: word order and category

shift in the premodifying string." *Pathway of Change—Grammaticalization in English*, ed. by Fischer Olga, Anette

Rosenbach and Dieter Stein, 39-66. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott (1993) *Grammaticalization*.

Cambridge: Cambridge University Press. [邦訳『文法化』九州大学出版会]

Sweetser, Eve E. (1990) *From Elymology to Pragmatics: Metaphorical and*

*Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University

Press. [邦訳『認知意味論の展開』研究社]

Traugott, Elizabeth (1995) "Subjectification in grammaticalization."

*Subjectivity and Subjectivisation*, ed. by Dieter Stein and Susan Wright, 31-

54. Cambridge: Cambridge University Press.

— ながわ・ゆうじ、福島大学助教授 —